

皇學館大学
ボランティアルーム

令和4年度 活動報告書



目次

指導教員挨拶	1
代表あいさつ	2
1. コーディネート報告	
・令和4年度ボランティアコーディネート 活動報告	7
2. ボランティアルーム企画・活動	
・ウクライナ人道危機救援義援金 活動報告	15
・ちょこっと福祉・伊勢社協 活動報告書	17
・くらたやま企画 活動報告	21
・倉陵祭担当（障がい者スポーツ） 活動報告	23
・他大学視察 活動報告	25
・季刊誌 報告活動	30
3. アンケート報告	
・令和4年度アンケート結果報告	35
4. 資料	
・令和4年度 ボランティアルーム学生スタッフ一覧	45

令和4年の活動を振り返って

ボランティアルーム担当教員

教育学部 叶 俊文

令和に入ってから猛威を振るった新型コロナウイルス。これによって世界中が振り舞わされたことになる。当然のことながら、ボランティアルームでも影響は大きかった。ボランティアを依頼してくれていた多くの施設では活動が無くなり、ボランティアの依頼も無くなってしまった。その中でも「自分たちに何ができるのか」ということが考えられていたように感じている。そのヒントをくれたのが、社会福祉協議会の方々でありました。年間報告会に足を運んでいただき、学生たちにたくさんアドバイスを頂いたことは、本当に感謝申し上げるところであります。ありがとうございました。

ボランティアの依頼が無くなった中でも、この期間を自分たちのスキルを上げる時間にしよう、外部への発信のお手伝いをしよう、勉強会を開いていこうというように、細々ながらも確実な活動をボランティアルームは行ってきたように思う。そして、令和4年度が幕を開けたことになる。ようやく下火になってきた新型コロナウイルスの影響の中で、いよいよ始まったということになる。

この一年はもう一度皇學館大学ボランティアルームを再生する期間になったように感じている。この間に、ボランティアルームを支えてくれていた学生は次々に卒業していき、これまでのボランティアルームの活動を肌で感じ知っている学生が少なくなっていった。しかし、ボランティアルームの学生スタッフとして新しい学生も入ってきた。新しい学生スタッフに「ボランティアルームとは何か」「どのように運営していくのか」などを伝えなければならぬ状況になった。正に、再生するための営みということになる。これは上級生の学生スタッフにとっても、「ボランティアルームを再確認する」ことにもなったように感じている。もう一度考え直す良い機会であったと感じている。

まだまだボランティアの依頼が少ない中で、季刊誌の発行や募金活動、倉田山清掃活動のように人との接触を少なくした活動が進められた。また、少しずつ動き始めた社会福祉協議会の活動にお手伝いとして参加することもできた。歩きはゆっくりであるけれども、歩みを進めることができたことは次への力になるように感じている。新しい学生スタッフも頑張り始めている。

もしかすると、来年度は本格的な活動ができるようになるかもしれない。そのための準備をこれからやらなければならない。これまでのようにボランティア依頼を受けることができるのか、来室した方ときちんと話ができるのか、電話対応は大丈夫か、学生への情報発信は大丈夫か、学生をボランティアに繋ぐことができるのか、そんなことが試されることになるかもしれない。そうした準備をしながら次の年に向かっていこう。来年こそ縦のつながり、横のつながりが大切になるかもしれない。みんなで力を合わせることを求められることになるのだから。

自分たちができること

皇學館大学ボランティアルーム 学生スタッフ

教育学部教育学科

4年 清水美玖

2019年から流行が拡大した新型コロナウイルス感染症により私たちの学生生活や生活様式等が大きく変化した。3年経った2022年も新型コロナウイルス感染症の流行の影響を受けながらの活動を余儀なくされた。しかし、「新型コロナウイルス感染症が流行しているからボランティア募集ができなくても仕方ない」と諦めてしまっただけでは前年からボランティアについて学習をしてきた意義が見出せない。

また、今年度の4年生で新型コロナウイルス流行前のボランティア募集や学外活動が活発であった活動の様子を知る学年が最後であるということから、少しでも皇學館大学ボランティアルームの本来の活動に戻せるように新学期が始まると同時に大学と相談しながら少しずつボランティア募集を再開した。新型コロナウイルス感染の拡大、減少に伴い、皇學館大学ボランティアルームの活動も制限を日々変更しながらの活動ではあったものの、前年と比較するとボランティアの依頼も少しずつ増加した。学外からボランティアを求める人とボランティアを希望する学生とを結びつける業務を主として、ボランティアの募集、企画など本来のボランティアルームの活動が取り戻せたのではないかと私は思う。

今年度はコロナ渦でも本来の活動に戻していく1年であった。世間の情勢や、皇學館大学やボランティアルームの現状が変化し活動ができなかった期間からどのように活動していくのかを見直して行動に移していく期間となった。スタッフがそれぞれ所属する企画も実際に行動に移し、昨年は学内で車椅子講座の開催だったのが今年度は学外で開催できたり、地域の方とのコラボレーションできたりとボランティアの輪を広げることができたと感じている。情勢が変化しながらもそれらに対応して活動ができたことは私たち学生スタッフにとっても大きな成長になり、来年度に繋げていくことができる。また、コロナ渦とともに企画を練ったり、地域の方や他大学の方と交流、活動ができた貴重な経験や知識は今後のボランティアルームの活動に役立つであろう。しかし、ボランティアの募集を再開できたことに対し、約3分の1が参加人数が0件で依頼先に返答することになったのはボランティアルームの課題であり、今後の依頼数にかかってくる問題になる。1年間の活動の経験を実際に今後活かしていくことができるか、日常の学校生活の中で学生に対しボランティアの魅力を伝えることができるかは今後の学生スタッフの努力次第である。皇學館大学内でのボランティアルームの知名度や学生にどのようにボランティア情報を知ってもらうか、SNSでの発信方法などの課題は多いが、臨機応変に対応してきた1年の経験があれば、これらの課題も解決していけるのではないかと思う。一人一人が学生スタッフとしてこれまでに得た知識と技術に加え、スタッフとしての責任とやる気を持ち、

取り組んでいくことができれば、ボランティアルームにとって大きな力となりさらに活動も発展させることができるだろう。

最後になりましたが、ボランティアの講習やボランティアの受け入れをしてくださったボランティア関係者の皆様に教職員とともに心より感謝申し上げます。どうか、今後とも変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

1. コーディネート状況報告

令和4年度ボランティアコーディネート 活動報告

1. 目的

皇學館大学ボランティアルームでは、ボランティア活動を求めている学生の支援を目的として活動している。ボランティアルームに所属する学生スタッフが、ボランティアをコーディネートすることを中心に考え、活動を行なっている。そこで、ボランティアのコーディネートについて今年度の活動を報告する。

2. コーディネート活動内容

学生スタッフの仕事の一つのボランティアコーディネーターとしての活動は、社会福祉協議会や地域の自治体など地域から依頼されるボランティアを受け付け、学生にボランティア情報を提供することで、地域と学生を繋ぐことである。（図1）。

学生へのボランティア情報提供方法は、掲示板、LINE、Instagram(インスタグラム)、X(旧Twitter)である。今までは掲示板は2号館1階ボランティアルーム横と6号館1階で行ってきたが、今年度からは2号館1階の掲示板を含めた3つの掲示板を使用することが可能となったため、ボランティアの種類により掲示を分けたり、募集だけでなく活動報告用にも掲示を用いたり、学生によりボランティアに対し関心をもってもらえるように改善を行った。

また、SNSでの情報発信の見直しを行い、メールの配信を廃止し、代わりに公式LINEを開設した。これによりボランティア情報を登録者に一斉に配信可能や、学生からのメッセージの対応など情報発信に関して以前より容易になった。さらに、新型コロナウイルス感染症によりオンライン授業が増えたことで、学校で直接掲示板を見られない学生も増えたため、手軽にボランティア情報をチェックできるようInstagramによる情報発信に力を入れ、学生の参加促進を図った。

ボランティアコーディネートを学生スタッフが行うことで、気軽にボランティアに参加することができ、学生のボランティア参加をより促すことができると考えている。しかし、学生スタッフがボランティアコーディネートを行うにあたり留意点もある。それは、地域と学生の関係を対等かつお互いに成長できる関係へと調整することである。円滑にコーディネートを行っていくために、ボランティア依頼先や参加学生と連絡を取り合うことや、大学ボランティアルーム間の事務処理など学生スタッフ一人ひとりが責任やコーディネーターとしての意識を持ち、活動に取り組んでいく必要がある。

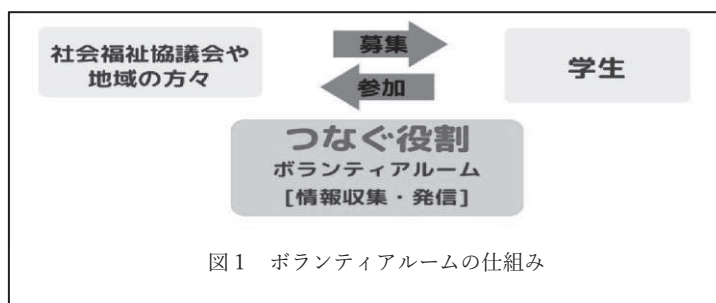


図1 ボランティアルームの仕組み

3. コーディネート状況

今年度の地域から依頼されたボランティア情報件数は53件(随時ボランティア含む)で、コーディネート件数は30件、コーディネート人数はのべ198人になる。コーディネート件数は昨年より大幅に増加し、コーディネート人数は昨年より194人増加した。新型コロナウイルス感染症流行により一昨年度、昨年度と依頼件数が0件に等しい状態であったが、今年度は少し感染状況が緩和したこともありコーディネート件数や人数は大幅に増加した。この結果は私たち学生スタッフにとって大変喜ばしい結果となった。しかし、依頼件数全てのボランティアをコーディネートすることはできず、同じ学生が複数のボランティアに参加していることから参加の実人数はもっと少なくなるため、大学内でのボランティアに参加する学生はまだまだ少ないと言える。内訳は以下の通りである。

ボランティア総件数	コーディネート件数	コーディネート人数
53 件	30 件	198 人

ボランティアルームでは下記のように依頼のあったボランティアを3つに種類を分類し情報を発信している。

- ①子どもサポート：子ども対象イベントスタッフ、特別支援学級活動、託児補助等
- ②地域援助：地域イベントコンサートスタッフなど
- ③福祉系：障がい者(児)、福祉競技スタッフなど

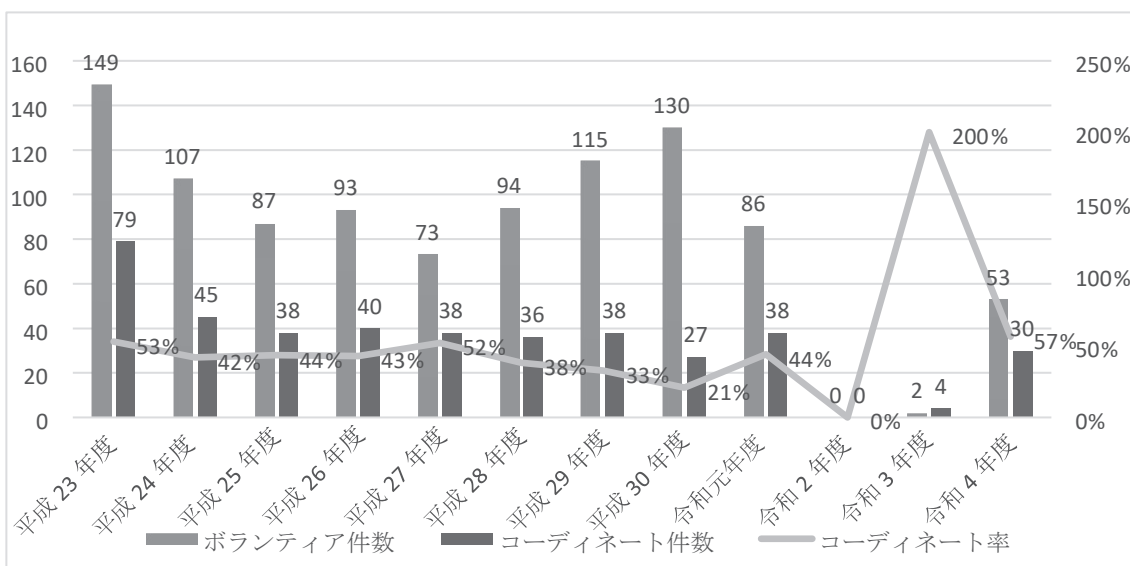
3つの種類のボランティアの情報件数は次の通りである。

	ボランティア件数	コーディネート件数	参加人数
子ども	28 件	17 件	127 名
地域	16 件	10 件	39 名
福祉	9 件	3 件	32 名

今年度は、ボランティアの依頼が53件と昨年度と比べ大幅に増加した。子ども系ボランティアは28件、地域系ボランティア16件、福祉系ボランティア9件となっている。ボランティア件数は新型コロナウイルス感染症の流行緩和の影響もあり大幅に増加し、それに伴い、コーディネート件数や参加人数も増加した結果となった。これまでの情報発信ツールとしてメールやLINE、掲示板が主であったが、メールを日常で見ることが少なくなってきたこと、オンライン授業で大学に来る頻度が減少したこと、LINEでの一般学生にボランティア募集を一斉に送ることができないという課題もあった。それらのことから、今年度からメールの配信を廃止し、新たに公式LINEでの情報発信を開始した。

これにより、登録者にはボランティア情報が一斉に送れるようになったが、QRコードを新たに配布という点ではなかなか登録者数が増えず、登録者をどのように増やしていくかは新たな課題となった。新たな取り組みに加え、学生スタッフが友人や周りの学生と一緒に参加しようと呼びかけていたことも結果に繋がったのではないだろうか。ボランティアに行きたい、気になっている学生に対し、ボランティアに参加する不安を学生スタッフが一緒に参加する、行った経験を話せることで不安を取り除くことができ、ボランティアの参加にも繋がっていくのではないだろうか。この結果を踏まえ、これからも学生スタッフ一人ひとりがボランティアに積極的に参加し、その経験や楽しさ、喜びを新たな学生に伝えボランティアの輪を広げていく必要がある。

前年度までのボランティア依頼件数とコーディネート率を比較すると以下の通りである。



ここ数年新型コロナウイルス感染症の流行によりボランティアの募集をすることも、多くの人数が集まる催し物の開催もできず、人と人との接触を控える傾向が続いていた中で、少しずつではあるが人数制限や感染対策をしながらボランティアの募集を再開し始めた。その結果、新型コロナウイルス感染症の流行前とまでは戻らなかったもののコーディネート率を見ると、過去1番高い結果となった。しかし、参加者0件で返答してしまったボランティアもあり、このような返答が続くと、皇學館大学ボランティアルームに依頼しても参加者が集まらないというイメージがついてしまう可能性がある。依頼がきたボランティアにはなるべく参加者を送れるように募集方法の見直し

や、積極的に声かけ、学生スタッフも参加するなどアプローチの改善と見直しをしていかなければならない。

平成 29 年度から新型コロナウイルス感染症の流行前まで行っていた月別ボランティアでは、一般学生の参加も多く、もう一度再開してもいいのではないかと考える。一般学生が参加しやすくしていくためには、スタッフと一緒に参加できる安心感や、一人で参加するのは避けたいなどボランティア参加に対する不安や緊張を取り除けるような環境づくりが必要である。以前までは月別ボランティアは月に一度であったが、回数を増やしていったり、学生スタッフが行く予定のボランティアを勧めるなどスタッフの対応や声かけも見直していく必要がある。

4. ボランティア登録学生についての詳細

ボランティア登録学生からみるコーディネート进行分析。今年度の公式 LINE の登録数は 169 人、Instagram のフォロワーは 366 人、X (旧 Twitter) のフォロワーは 366 人であった。

登録数の増加がどの SNS でも伸び悩んでいたのが今年度の課題であったが、その原因としては、新型コロナウイルス感染症により、例年 4 月に行われていた各学年のガイダンスが今年度もなかったことによるアピール不足や、公式 LINE の開始時期が 4 月からではなく夏頃になり開始時期が遅れてしまったことなどが挙げられる。

ガイダンスでは LINE 登録の QR コードの配布し登録を行ったり、各学年にあった DVD も上映したりしている。それらをきっかけにボランティアに興味をもったという学生も見られた。今年度も動画は作成し、ボランティアルーム内で流していたものの一般学生が見る機会が限られていたため、アプローチが弱かったことが課題として挙げられる。ガイダンスが学生にボランティアルームの存在やボランティアに興味をもってもらえる大きな行事であるということを再度認識しガイダンスでの取り組みを良いものにしていく必要がある。また、ガイダンス以外でのアプローチ方法も考えていく必要もあるといえる。

5. 今年度のボランティアルームとしての活動

昨年度は学生スタッフのスキルアップとボランティアルームの維持の 2 点を課題としており、スタッフのスキルアップに関して、今年度は学生スタッフの普段の業務についてや依頼先との電話やメールのやりとりの方法などの勉強会を実施した。それにより実際に業務をできるようになった学生スタッフも増加し、業務効率も良くなった。ボランティアルームの維持に関しては一昨年度、昨年度とボランティアの依頼がなくボランティアルームの存在意義や存続が危ぶまれた。今年度に入り、新型コロナウイルス感染症が増加・減少を繰り返す中で、ボランティアルームの活動も感染数に伴い活動の制限を受けつつも、ボランティアの募集を再開することができ、コーディネートも約 200 人近くすることができた。今後も感染症やどのようなトラブルが起きかわからない中で、私たちが学生スタッフには臨機応変に対応する力が求められている。今年度よりもより発展した活動にしていくためには、今年度以上に学生スタッフが依頼のあったボランティアの内容共有や進捗状況などを全員が把握し、柔軟に対応していかなければならない。

また、ボランティア募集の再開のなかで、大学とボランティアルーム間の書類のやりとりで提出の不備が依頼件数が徐々に増えれば増えるほど目立つようになってしまった。書類提出や管理方法の見直し・改善を行い、提出期限や一般学生に提出物をお願いする際の対応方法なども考えてスムーズに業務をこなせるようにしていかなければならない。

さらに、コーディネート件数を継続また増やしていくためには、学生スタッフ全員の積極的な参加が必要になってくるであろう。ボランティアルームの本来の役割であるボランティアを求める方々とボランティアに参加したい学生を繋げるためには学生スタッフの自らのボランティアの参加経験や積極性が対応にも繋がってくると考えている。来年度からは、新型コロナウイルス感染症の流行前の活動を知る学生スタッフはいなくなるため、今後ボランティアルームの活動を発展させていくためにもさらにスタッフ一人ひとりの行動力が必要になってくるであろう。コーディネートすることも大切であるが、数字を上げることだけにとらわれず、ボランティアの楽しさや魅力を伝えたり、ボランティアを身近に感じてもらったりなど本来のボランティアルームの形を忘れずにコーディネート業務を行っていかねばならない。学生スタッフが多くのボランティアに参加し、経験を積んでいくことは自分の為にもなり、スタッフとして、ボランティアに参加する学生のサポートをし、ボランティアの良さを伝えることができる。私達のボランティアへの想いがいつか大きな花を咲かせられるように、スタッフ一同改めてボランティアと向き合っていきたい。

【文責：教育学部教育学科4年 清水美玖】

2. ボランティアルーム企画・活動報告

令和4年度 ウクライナ人道危機救援義援金 活動報告

1. 目的

令和4年2月24日にロシアによるウクライナ侵攻が開始された。また、ウクライナ各地で戦闘が激化したことにより、ウクライナの市民の死傷者数や避難するためのインフラへの被害が今日も起こっている。

この状況を受け、皇學館大学ボランティアルームは皇學館大学の本部と協同し、ウクライナの人々の避難を受け入れる周辺国、あるいは他の国に支援を行っていくことを決めた。

2. 活動報告

実施日：令和4年11月24日（木）

12月7日（水）

12月15日（木）

実施時間：12：40～13：30

活動場所：倉陵会館1階食堂前

参加者：8名～10名

企画担当者：4年生 森啓悦、山崎皓平

3年生 小芝実結

2年生 鎌田真穂

1年生 杉本理沙、菌部萌果、美濃部奏美

3. 活動報告

今年度は台風災害の義援金募金活動ではなく、ウクライナ人道危機救援義援金活動を 実施した。

活動場所は、昼休憩の時間に多くの学生や教職員が行き来する倉陵会館1階の食堂前で募金の呼びかけを行った。活動場所は一ヶ所であったが、企画担当者が必ず参加できるようにした。

また、募金活動を実施する前に学生担当に企画案を提出し、大学と協同で行い、集まったお金の集計は、大学の管財担当に依頼した。各種申請書類の提出と同時進行でボランティアルームのスタッフと協力しながら、募金活動の名前がわかる看板を制作した。以前は、募金箱も作成していたが、お金を取り扱っているということで、鍵のついているプラスチックの募金箱を使用した。なお、SNSの方でも募金活動の宣伝を行ってもらった。

4. 総括

ウクライナ人道危機救援義援金の募金活動を3日間行い、11月24日に1,998円、12月7日に712円、15日に3,171円、合計5,881円が集まった。実施場所が一ヶ所で実施時間が短くはあった

が、多くの学生が主体的に募金活動に参加した。ただ、反省点として、募金を実施するのが遅すぎたこと、募金場所が一ヶ所であったことが挙げられる。ウクライナ侵攻が始まってすぐに募金活動が実施できたら、もっと多くの人に関心を持ってもらえることができたと考える。また、昨年は6号館も募金を実施していたが、募金に参加するスタッフが少なく、6号館での募金を中止した。6号館に12時30分ごろにスタッフを配置し、移動し始めた学生に募金を呼びかけることをしても良かったのではないかと反省している。来年度は、義援金や救援金以外の募金も探して行っていくことをしていく。

また、募金活動を通して、ウクライナの現状や社会問題について知る良い機会にもなったと思う。今後も学生たちが積極的なボランティア等の活動に参加することを期待している。

【文責:現代日本社会学部 現代日本社会学科3年 鎌田 真穂】

令和4年度 ちょこっと福祉・伊勢社協 活動報告書

1. 目的

ちょこっと福祉・伊勢社協のグループは、例年、伊勢市社会福祉協議会さんのご協力のもと、伊勢市社会福祉協議会さんとの共催という形で、夏休みに伊勢市内の小学生を対象に皇學館大学にてちょこっと福祉体験を行っている。しかし、新型コロナウイルス感染症が蔓延し始めて以降は、従来通り開催することは難しく、実際、中止せざるを得ない年であった。そのような状況の中、今年度はコロナ渦であったが、感染対策を十分に講じながら伊勢市社会福祉協議会さんとボランティアルームが共同で、げんこころ一むにてふれあい福祉体験を開催した。学内での活動は控えたりと、規模縮小・実施場所の変更などはやむを得なかったが、コロナ渦で様々な制約がかかる中、可能な限り本来の形で福祉体験を実施することができたことはスタッフにとってもうれしい限りであり、感謝の気持ちでいっぱいである。また、例年、福祉体験に加え簡単な工作等の作業も行っており、今年度はペットボトルキャップを利用したエコなおもちゃ作り体験も併せて実施した。

2. 活動内容・報告

活動の詳細は以下のとおりであるが、今年度は、令和5年8月21日（日）、28日（日）の全2回に分けて福祉体験とエコなおもちゃ作り体験を実施した。福祉体験では、8月21日（日）に高齢者疑似体験を、翌週28日は、車いす体験をそれぞれ実施した。福祉体験実施の目的は、子どもたち、ボランティアルームスタッフともに、高齢者や障がいを抱えている方の気持ちを理解して、少しでも福祉に興味・関心を持てるようにすること。エコなおもちゃ作り体験実施の目的は、ペットボトルキャップのような私たちの身近にあるものの利用が、SDGsなどの環境にやさしい取り組みにつながることを、子どもたち自身が実感し、これからの日常生活を送るうえで自分たちにもできることを考えるきっかけにすることにある。

活動日時：令和4年8月21日（日）…① 28日（日）…②

※両日とも10：30～12：30

活動場所：イオンタウン伊勢ララパーク

対 象：小学4年生から高校3年生

参加人数：①8名（うち、学生スタッフ5名）②…15名（うち、学生スタッフ5名）

活動内容：高齢者疑似体験、車いす体験

ペットボトルキャップを使ったエコなおもちゃ作り体験

高齢者疑似体験では、子どもたちは実際に高齢者疑似体験装具を装着し、ララパーク店内をめぐり、身体の重さ、肘や腰の動きにくさを体験した。また、白内障を体験できるゴーグルをつけて、目の衰えや見やすい色、見えにくい色を体験した。

車いす体験では、子どもたちは車いすの各部位や操作方法の説明を聞いたあと、二人一組になって実際にララパーク店内を走行し、車いすでの移動や買い物を疑似体験する中で、互いに車いすの操作方法を学んだり車いすを押すといった介助を体験した。

エコなおもちゃ作り体験では、ペットボトルキャップなどを活用して、オリジナルのマグネットを作成した。

3. 活動風景

高齢者疑似体験



車いす体験





4. 参加者の声

- ・車いすに乗っている人の目線が分かりました
- ・声掛けの必要性が分かり、とても良い体験でした
- ・車いすでカーブを曲がったり、段差を超えるのが難しく、怖かったです
- ・乗る人より操作する人のほうが大変で、車いすを押す人との距離感がつかみにくく、ぶつかりそうになった
- ・意外と振動があった
- ・次は妊婦さんの体験をしてみたいです
- ・目の見えない人の話を聞いたり、視覚障害者の視野の体験をしてみたいです

5. 反省、まとめ、今後の展望

今年度の活動を振り返って、良かった点は、福祉体験を通して参加者が高齢者や障がい者の立場になって当事者の気持ちを考えられたことである。また、ボランティアルームスタッフも、ボランティアとしてサポートに入る中で、高齢者疑似体験装具を装着した状態での移動の大変さを実感し、多くの学びを得られた。その意味で、この活動は、高齢者の身体状況や車いすを利用する人の気持ちを理解し、バリアフリーについて考えたり、自分たちにどのようなサポートができるのかを考えるきっかけになったといえるであろう。子どもたちのみならず、スタッフも実際に疑似体験をしたことで、腰が思うように動かない状態で歩くことの大変さや怖さ、手を伸ばして高い位置を見上げ、物を取ったり見ることの苦労、白内障や耳が遠くなることの影響で文字が見えにくくなったり、人の声や周りの音が聞きとりづらくなることを肌で感じられた。

一方、反省点は、特に車いす体験に関しては、本来の趣旨とはずれ、車いすにのって店内を回るだけの体験になってしまったことである。車いすで段差を通行する場面設定ができておらず、仕方なくマットで段差を作る結果になってしまったので、今後はルート設定の工夫をする必要がある。また、店内を回る際に、狭い場所で車いすが場所を占めてしまったがために、買い物に來ている方が通行できなくなる場面があった。よって、今回のように多くの人が集まる公共施設

のような場所で活動を行う際には、参加者にも事前に体験ルートを確認してもらうなどして買い物客に迷惑をかけないための注意点や活動時のルールを伝えることを意識したい。その他、参加者の声にもあったように、他の福祉体験も視野に入れて体験をより充実したものにしたい。

最後に、エコなおもちゃ作り体験に関しては、始めるまでに時間がかかってしまい参加者を待たしてしまう場面があったり、参加人数に対する準備が不足していた点が反省点である。原因は、スタッフの間での打ち合わせ、当日の流れの確認が十分にできていなかったことである。そのため、スタッフ同士の密な連絡を心がけ、当日、皆が役割を分担して無駄なくスムーズに作業を行えるようにしたい。

【文責：教育学部教育学科 3年 大倉すず】

令和4年度くらたやま企画 活動報告

1. 目的

介護付き有料老人ホームくらたやまとグループホームくらたやまの利用者の方々との交流や職員の方々による施設概要の説明や利用者の特性等を説明していただくことで利用者の方々への理解を深めていくことを目指している。利用者の方々との交流会や勉強会は、中々経験することができない貴重な機会である。そのため、福祉関係に就職する学生や興味を持っている人が、交流会では利用者の方々とのコミュニケーションを、勉強会では知識を中心に学べるように企画を行った。ただ、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、交流会が中止となった。

2. 活動内容

① 交流会

新型コロナウイルス感染症の影響により中止になる。

② 勉強会

実施日：令和4年12月8日(木)

時 間：17:00～18:20

場 所：皇学館大学 511 教室

企画者：4年 勝又 未結、須場 聖羅

3年 國分 大雅、小芝 未結

2年 竹内 七菜実、鎌田 真穂

1年 山口 真凜、原 一貴

3. 活動報告

今回の企画は、学生スタッフの1年生1名、2年生2名、3年生5名、4年生1名の計9名が参加した。講師として、くらたやまの職員の方3名にお越しいただいた。

まず勉強会を始めるために、参加者には新型コロナウイルス感染症の対策として、あらかじめ決めておいた座席に着席してもらい、窓と扉を開け、終始換気も行った。

勉強会は、17時から開始し、最初にくらたやま職員の方から介護付き有料老人ホームとグループホームくらたやまの施設概要について説明があった。その後、認知症の種類やどのような症状があるのかについて、クイズも交えながら学んだ。また、認知症の方との接し方についても、注意点を踏まえて教えていただいた。全ての話を聞き終えた後に、質疑応答の時間を設け、数名の学生スタッフが質問を行い、最後に、くらたやまの職員の方々と挨拶をし、勉強会は終了した。

参加したスタッフには勉強会のあとに、良かった点と悪かった点、感想をLINEで提出してもらった。それから、職員の方にメッセージを送らせていただいた。

4. 総括

今年度は、一昨年にも行った勉強会に加え、新型コロナウイルス感染症の流行後初となるオンラインでの交流会を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、くらたやま職員と学生スタッフだけの交流だけになってしまった。勉強会では、施設の利用者の多くが持っている認知症について学んだ。新型コロナウイルス感染症による活動の規制が緩和されてきていることを踏まえ、来年度は一般学生の参加も視野に入れていく必要があるだろう。そして、来年度も勉強会と交流会を実施する場合、最初に勉強会を実施してから、交流会という順番にしていこうと思う。最初に勉強会をして、利用者の方々とコミュニケーションの取り方や施設の概要、利用者の方の特性を知ることができる。そのようにして、知識を深めることで交流するときに、利用者の方々と楽しく交流できることを目指していく。

結果としては、目的である利用者との交流は行うことができなかったが、施設の概要や利用者の特性については達成することができた。来年度では、交流会の実施や規模の拡大など、今年度の経験を活かしながら自分たちにできることを模索して取り組んでいきたい。

【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科 2年 鎌田真穂】

倉陵祭担当（障がい者スポーツ） 活動報告

1. 目的

この活動を行う目的は、「障がい者スポーツの魅力や楽しさを知ってもらうこと」である。また、私たちボランティアルームスタッフは、今まで障がい者スポーツに触れる機会のなかった高校生や大学生たちが、実際に体験することで、障がい者スポーツの魅力や楽しさに初めて気づき、心から楽しんでもらうことも目的の一つである。本年度は、新型コロナウイルスの影響を受けながら、大学生や高校生の受け入れを行ったため、消毒やマスクの着用など感染症対策にも徹底しました。今回の企画を通して、ボランティアルームの存在意義を広めることやスタッフ同士の交流もできると考えた。

2. 活動内容

【ポッチャ】

- ・ 白い目標球（ジャックボール）に自分のチームのボールを近づけて得点を競う
- ・ 2カ所用意し、公式ルールでゲームをして交流を深めた

【豆つかみ】

- ・ 視野狭窄メガネと色の識別を難しくするメガネを使い、指定した色の豆を箸で取り別の容器に移すゲーム
- ・ 8カ所用意し、参加者同士で対決を行った

【車いすバスケットボール】

- ・ 車競技用車いすを活用し、肢体不自由が対象となるスポーツ
- ・ 椅子を5台、ボールを5個用意し、ドリブル・パス・シュートを行った

3. 活動報告

今回、ポッチャ・豆つかみ・車いすバスケットボールを実施する上で、各競技の指導方法や参加者の募り方の対策は行っていたため、多くの高校生や大学生が参加してくれたが、スタッフの服装や障がい者スポーツの知識不足により、目的であるボランティアルームの存在意義や障がい者スポーツの魅力や楽しさを伝えることができなかった。また、体験した参加者からの感想や意見を聞く機会があったのにも関わらず、記録に残すことができなかった。しかし、障がい者スポーツを通し、年齢を超えて関わることができ、参加者に障がい者スポーツの楽しさを知るきっかけを与えることができたため、目的の一つは達成することができた。

4. 反省

- ・ スタッフと分かる服装で統一していなかった
- ・ 掲示板に張り紙を貼っていなかった
- ・ 障がい者スポーツをした感想を聞いていなかった

- ・障がい者スポーツの知識があまりない状態で運営をした

5. まとめ

新型コロナウイルス感染症の影響で、外部の方々に対する規制などから予定より参加者が少なかったが、反省を修正し、体験だけでなく参加者の声に寄り添える倉陵祭にするべきだったと感じた。今回のことを踏まえ、今一度、ボランティアルームスタッフとして何ができるかを考えることで、障がい者スポーツを知るきっかけを与えることや、障がい者スポーツの魅力や楽しさを伝えるために必要な指導力の難しさ・大切さに気づくことができた。

6. 活動の風景写真

〔車いすバスケットボール〕



〔豆つかみ〕



【文責：教育学部教育学科2年 篠原広樹】

他大学視察 活動報告

1. 目的

他大学視察は、ボランティア情報を学生に提供する組織同士が交流を行い、それぞれの活動の紹介やボランティアについての意見を通して、ボランティアについての考えを深め、今後につなげていくために行っている企画である。また、ボランティアルームに所属してまだ日の浅い1年生や、ボランティアについての知識が少ない学生スタッフが、ボランティア活動に対してより広い視野をもって活動してもらうことを目的とした企画でもある。

前年度まで新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、2年ほど活動をしていなかった。毎年、愛知淑徳大学のコミュニティ・コラボレーションセンター（通称 CCC）さんと視察を行っていたが、今年度は CCC さんだけでなく、三重短期大学のボランティアサークルさんとも交流を行った。

2. 活動内容

毎年夏ごろに行っていたが、今年度は夏と冬の2回に分けて交流を行った。夏は、三重短期大学ボランティアサークルさんで行い、冬には例年通り、CCCのスタッフさんと交流を行った。どちらの交流も、意見を積極的に発表できるようにトークテーマを設け、グループごとにディスカッションを行った。

☆夏の活動

日時：令和4年9月10日（土） 11:00～13:00

場所：皇學館大学 212 教室

内容：(1) 自己紹介

(2) 各大学の紹介

(3) 各機関の紹介

(4) アイスブレイク

「共通点グランドスラム！」

(5) グループディスカッション

現状や課題等の報告や、課題の解決に向けての話し合い

「新型コロナウイルスが蔓延する中で、今できるボランティアは何か」

「みんなを今よりちょっと幸せにするために、どんなボランティアをすればよいか」

(6) 振り返り

☆冬の活動

日時：令和5年2月12日（日） 10：30～12：00

場所：愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパス コミュニティ・コラボレーションセンター内

内容：(1) 自己紹介

(2) 各大学の紹介

(3) 各機関の紹介

(4) 現状の課題について

(5) グループディスカッション

「新型コロナウイルス感染症が拡大する中、これからどうしていくか」

「ボランティアの参加者を増やすためには」

(6) まとめ

3. 活動報告

夏の活動の参加者は、皇學館大学ボランティアルームスタッフ10名、三重短期大学の学生スタッフは3名であった。一方、冬の活動では、皇學館大学ボランティアルームスタッフ9名、CCCスタッフは7名であった。両者とも最初に自己紹介、各大学や機関の紹介を行った。

三重短期大学さんとの交流では、「共通点グランドスラム！」というアイスブレイクを行った。このアイスブレイクは、3グループに分かれ、グループ内で共通点を多く見つけたグループが勝ちというゲームである。これを行うことで、相手のことをより知ることができ、場の雰囲気も和んだと感じた。その後、現状報告や課題を共有し、「新型コロナウイルス感染症が蔓延する中で、今できるボランティアは何か」や「みんなを今よりちょっと幸せにするために、どんなボランティアをすればよいか」というテーマでグループワークを行った。そして、グループごとに意見をまとめたものを発表し、全体で共有した。

愛知淑徳大学のCCCさんとの交流では、初めから場の雰囲気も良く、アイスブレイクを行わずに、ボランティアについての現状報告やグループディスカッションがスムーズにできた。話し合った内容は三重短期大学さんとも話し合った内容に加え、「ボランティアの参加者を増やすためにはどうすればいいか」なども話し合った。それに付け加え、CCC内の掲示やパンフレット等も見せていただいた。その後、記念撮影をし終了した。

以下、グループワークで得た意見を一部取り上げてまとめたものである。

三重短期大学さんとの交流会

○テーマ：新型コロナウイルスが蔓延する中で、今できるボランティアは何か

グループ①

- ・オンライン体験型の活動
- ・SNSの利用 / ごみ捨ての回数を増やす

グループ②

- ・オンラインで子どもに勉強を教える
- ・室内でなく、室外の活動を増やす

- グループ③
 - ・手話を極める
 - ・短時間ででき、密にならないボランティア
 - ・学校周辺の清掃活動
 - ・募金（お金に限らず、ペットボトルキャップの回収など）

愛知淑徳大学 CCC さんとの交流会

○テーマ：ボランティアの参加者を増やすためにこれからどうすればよいか

- グループ①
 - ・ルームの訪れやすい雰囲気づくり
 - ・まずはルームメンバー内の交流会→参加しやすい雰囲気づくり
- グループ②
 - ・掲示板のレイアウトの工夫
 - ・パンフレットやチラシ作りなど広告面での改善
- グループ③
 - ・人が来てくれるような地盤づくりと環境づくり
 - ・年間報告会の資料などの発信（一般学生にもっと知ってもらうため）

4. 参加者の感想

☆夏の活動

○ボランティアルームスタッフ

- ・三重短期大学さんの話を聞いて、ボランティアに対する考え方が変わった
- ・児童向けや国際向けなど多様な視点から見たボランティア活動を知ることができた
- ・今日話し合ったことを今後の活動に生かしたい

○三重短期大学 学生スタッフさん

- ・ボランティアの種類が多くて驚いた
- ・教育系の活動など学生のニーズに合わせたボランティア活動も多くあった
- ・アイスブレイクでお互いの交流が深まってよかった

☆冬の活動

○ボランティアルームスタッフ

- ・CCC さんの話を聞いて、SDGs にも目を向けようと思った
- ・ボランティア募集の掲示が工夫されていて、見やすかった
- ・今回の経験をボランティアルームの発展につなげていきたい

○愛知淑徳大学 CCC スタッフさん

- ・自分たちで企画・運営しているところがすごいと思った
- ・社協さんとの連携がしっかりとれており、そのつながりを生かしている
- ・学生間の交流をもっと増やしてもよいと思った

5. まとめ

今年度の他大学視察は、約3年ぶりの開催であったため、どう話し合いを進めていくべきか迷うところも多々あった。夏の活動では、アイスブレイクの時間を取りすぎてしまい、グループディスカッションの時間を十分に取ることができなかった。しかし、夏の活動の反省を生かし、冬の活動ではきちんと時間配分ができ、充実した議論を行えたと考える。

今年度は、他大学視察の目的としている「ボランティア活動に対してより広い視野をもって活動してもらうこと」が達成できたと考える。交流会後の振り返りカードにも、「ほかの大学との交流を通じて、ボランティアに対する考え方が変わった」や「ボランティアの募集では、チラシや広告など身近なところからボランティアについて知ってもらうべきだと感じた」などボランティアルームをよりよくしていこうという意見が多数あった。

今回1年生や2年生の参加が多かったが、来年度からは学年問わず多くのスタッフに参加してもらい、ボランティアルームを全員でよくしていこうという意識を持たせたい。そして、たくさんのボランティアにかかわっている人たちの話を聞くことで新たな考え方や自分の考えも深まると考えるため、今回交流させていただいた三重短期大学ボランティアサークルさんや愛知淑徳大学のCCCさん以外にも目を向け、連絡をとる等交流を行っていききたい。

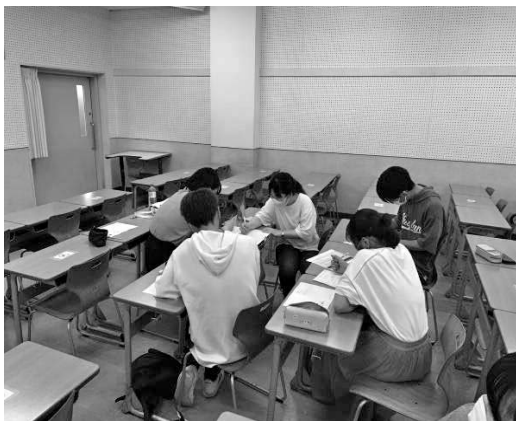
今年度の視察を通して、チラシやパンフレットなどの広告面やルームの雰囲気作りなど今できる環境整備、SDGs とつながる小さな取り組みなど身近なところから改善していこうと思った。また、ボランティアルームがより成長していくために、来年度も他大学視察を積極的に行っていききたい。

最後に、この企画にご協力いただいた三重短期大学ボランティアサークルの学生スタッフさん、愛知淑徳大学 CCC 担当の秋田さんはじめ関係者の皆様に感謝申し上げます。今後も、皇學館大学ボランティアルームがより一層精進していくためにも、今後とも交流をよろしくお願い致します。

6. 活動の様子

○三重短期大学さんとの交流会

グループディスカッション



集合写真



○愛知淑徳大学 CCC さんとの交流会

お互いの大学紹介



パンフレット



CCC 学生団体一覧



集合写真



【文責：教育学部教育学科2年 石井 陽菜】

季刊誌 報告活動

1. 目的

季刊誌は学生用と外部用の2種類を作成し、ボランティアルームの存在や活動、ボランティアスタッフについての情報発信を目的として内容を考えている。

皇學館大学の学生用季刊誌にはボランティア情報や学生の声、ボランティアや福祉に関する知識の説明を入れ、初めてボランティアをするという方やボランティア経験者の方、ボランティアに興味がある方など幅広い学生にボランティアの参加を促すことを目的としている。社会福祉協議会等を通じて配布している外部用の季刊誌には、ボランティアルームの概要や活動内容を中心にボランティアルームの存在や活動を知ってもらえるような内容にしている。

2. 活動内容

季刊誌を発行するにあたってミーティングを行い、担当者と相談しながら年間スケジュールを立てた。季刊誌の各担当同士でどのような内容にするか、情報共有を行いながら、学生用(夏号、秋号)の2号、学生用(夏号、秋号)の2号を発行した。

学生用は昨年度の発行数をそのまま引き継ぎ今年度も30部発行することに決めた。一昨年からは始めたボランティア経験者のインタビューを取り入れ、福祉やボランティアのための知識も掲載し、ボランティアについて興味を持ってもらえるような工夫を行った。

外部用の季刊誌は、三重県社会福祉協議会、松阪市社会福祉協議会、伊勢市社会福祉協議会、伊勢志摩バリアフリーツアーズセンター、四日市市社会福祉協議会の5団体に向けて10部ずつ発行した。誰が見てもわかりやすいような内容を心がけた。

3. 活動報告

学生用	発行予定月	発行月	発行部数
夏号	10月	11月	30部
秋号	12月	1月	30部

今年度も2号館1階のボランティアルーム前と6号館1階の提示に設置して学生が自由に手に取れる形で配布した。

今年度は担当者の中でペアを3組作り、学生用と外部用でそれぞれ1人ずつ制作にあたったため、グループ内での相談や共有が少なかった。去年のテスト期間や夏休みの間での制作を辞めるという反省を生かし、発行予定月を遅らせたが情報共有や打ち合わせ不足により、夏号・秋号と発行予定月より1ヶ月遅く発行に至ってしまった。グループ内で制作段階や内容の共有を増やしたり、作成者同士だけでなく、学生スタッフ全体にどのような内容を季刊誌で取り上げるべきか聞いてみるなど、もう少し作成面で改善が必要だと感じた。

4. 反省と課題

1) 内容について

よりよいボランティアの情報誌を目指していくために、学生用は学生が知りたい、知ってよかったと思えるボランティアや福祉の情報や掲載方法を季刊誌の担当者を中心に考える必要がある。学生がボランティアや福祉でどのような情報を知りたいのか、求めているのかを季刊誌のグループでもアンケートを重ねて検討していきたい。

外部用には昨年度同様にボランティア経験者のインタビューを引き続き掲載していくのが良いのではないかと考えている。

2) 配布方法について

今までと同様に紙媒体のみの発行であったが、Instagram や X (旧 Twitter) のような SNS での情報発信も活発になってきているため、PDF を用いた電子媒体でも掲載し、携帯やパソコンからでも気軽に季刊誌を読めるように工夫をしていきたい。外部用について社会福祉協議会 5 団体から配付箇所を増やすかという検討もしていきたい。

5. まとめ

今年度は昨年度の反省や課題から発行予定月や掲載内容、アプローチの仕方を模索した。また、担当者が全員集まる機会が今年度は一度しかなかったため、担当者全員が集まる機会を作り、意見を出し合いながら全員がそれぞれの号に目を通し、納得できる一冊にしていきたいと思う。「見やすい・分かりやすい・読みやすい」を追求し、見る人のニーズに合った季刊誌を目標にしていきたい。

【文責：教育学部教育学科3年 井坂安寿】

3. アンケート報告

令和4年度アンケート結果報告

1. 目的

今回のアンケートは、『新型コロナウイルスの影響で行動が制限されている中、学生に対してどのように関わっていくのかを図る』、『ボランティア活動によりどんな力が付くのか理解し、今後の活動に活かしていく』の2つを目的として調査を行った。

2. 活動内容

今年度のアンケートの回答はすべて Google Forms に統一し、回答ページの QR コードを載せたプリントを各学年・学科の講義で配布した。配布する際にプリントを人数分用意していたが、QR コードをモニターに映す・複数の QR コードを載せたプリントを学生に QR コードを読みに来てもらうといったペーパーレス化を行った。また、昨年度は学年・学科のグループ LINE にアンケートの配布を行っていたが、今年度では新たに設けた公式 LINE を用いてアンケートの配付を行った。

一昨年、昨年度に比べボランティアの依頼が多くあったが、新型コロナウイルス感染症の規制・自粛は制限されたままであったため、昨年度のアンケートに引き続き、ボランティアに参加するどのような力を培えるのかといった、実際にボランティアに参加したことを想定した項目を取り入れた。また、本学の学生がボランティアに何を求めているのか、ボランティアルームは学生とどのような形で関わっていくべきなのかなど、ボランティアルームの指針に関する項目は昨年度のままにしてアンケートを行った。

アンケートの実施は以下の通りである。

開催期間：2022年12月19日～2023年1月27日

対象者：文学部	約 1,330 名
教育学部	約 980 名
現代日本社会学部	約 500 名
合計	約 2,810 名

方法：Google Forms でアンケートの作成。また、Google Forms の QR コードが載った画面・用紙を許可がとれた講義で配布。

アンケート内容：アンケート項目は以下の 10 項目である。

- ①学年・学科
- ②ボランティアルームの認知度
- ③ボランティアルームの活動内容
- ④ボランティア情報の入手方法
- ⑤今年度のボランティア参加率
- ⑥今年度参加してみたいと思うボランティア

- ⑦参加してみたいと思う具体的意見
- ⑧今後参加してみたいボランティアの分野
- ⑨ボランティアに参加することによって、何が得られると思うか
- ⑩ボランティアルームへの意見・要望・改善点

3. 結果報告

文学部約 1,330 名、教育学部約 980 名、現代日本社会学部約 500 名の合計約 2,810 名にアンケートを行った結果、得られた回答数は 331 件であった。昨年のアンケート結果は 47 件、一昨年のアンケートは 202 件であり、去年に比べて 4 倍以上に増加している。

以下、得られた結果を順に示していく。なお、【複数回答可】のある項目はグラフの割合が全体 (331 件) に対しての回答数であるため、合計しても 100%にはならない。

①あなたの学年を選んでください。

1 年	251 件
2 年	55 件
3 年	18 件
4 年	7 件

①-2 あなたの学科を選んでください。

神道学科	5 件
国文学科	26 件
国史学科	8 件
コミュニケーション学科	35 件
教育学科	211 件
現代日本社会学科	46 件

学年は「1 年」「2 年」「3 年」の順に多く、学科では「教育学科」が他の学科よりも抜きん出て多い結果となった。

今回のアンケートでは QR コードを教室のモニターに映す・教室前方に QR コード用紙を設置することで集計を行ったが、用紙を配布しなかったためその場で回答しなかった学生がいると考えられる。

今回のアンケートでは、講義時のアンケート方法以外にも、学内の掲示や SNS での集計方法を充実させる必要がある。

②ボランティアルームを知っていますか。

はい	245 件
いいえ	86 件

②-1「はい」と答えた方に質問です。LINE、SNS などでボランティアルームを登録していますか。

はい	197 件
いいえ	67 件

ボランティアルームの認知度と登録の項目では、認知度「はい」が多く、登録「いいえ」が約 75%の結果となった。

今年度はガイダンスでの紹介を行うことができたため、1 年生などにもボランティアルームを知ってもらえる機会があったこともあり、70%以上の学生が「ボランティアルームについて知っている」と回答している。その反面、20%以上の学生がボランティアルームについて認知していないことがわかった。この値は少ないとは言い難いだろう。これらの学生にボランティアルームを認知してもらえるよう、掲示物の更新や、SNS での活動報告など、情報の拡散をより積極的に行っていくべきである。

登録については、ボランティアルームに登録する機会が少ないことと、「ボランティアルームを知っている」と回答した学生が多かったにもかかわらず、「登録していない」と答えた学生が多く、登録の機会を増やすことが課題である。

登録の機会については、ボランティアルーム内、パンフレット、ボランティアルーム横と 6 号館の掲示がある。これらから、ボランティアに興味がある学生であっても、自発的な登録や機会を逃してしまうとボランティアルームに登録しないままにしていると考えられる。どのようにして目につけてもらえるような発信を行うかが必要になってくるだろう。「ボランティアに興味が無い、あるいは自分には必要がない」と考える学生に対しては、ボランティアに参加することで得られるメリットを、参加者を通じて発信することが必要である。また、ボランティア後に参加者にアンケートを取るなどの活動を取り入れることも考えなければならない。

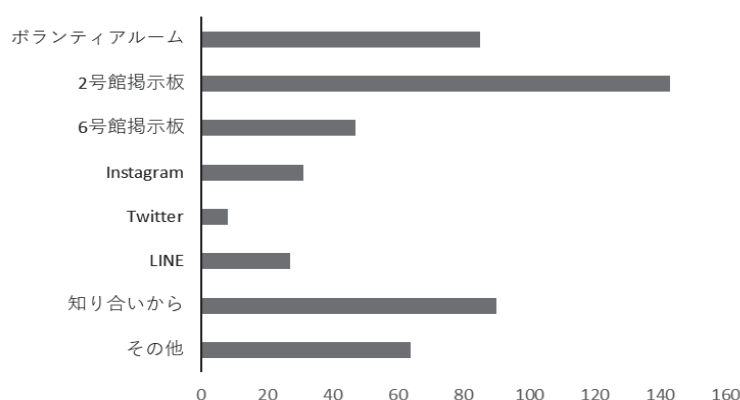
また、ボランティアの強制参加を警戒している学生に対しては、ボランティアルームの正確な情報を伝えるために説明会を開くなど、ボランティアルームについて知る機会を作るようにしていくべきだろう。今後コロナウイルスが 5 類へと引き下げられるようになり、活動の幅も広がっていくだろう。だからこそ、ボランティア参加者を増やすために、新型コロナウイルス流行以前の活動を取り入れや新しい登録の機会をルームスタッフ内で考えていく必要がある。

③ボランティアルームの活動を SNS などで見たことがありますか。

見たことがある	81 件
見たことがない	250 件

「ボランティアルームの活動を SNS で見たことある」という学生は約 25%であった。ほとんど学生が SNS での活動を見ていないという結果になり、ボランティアルームを知っているが SNS などの活動を知らない学生が多いということが分かった。このことから、SNS の活動を活発に行っていくだけでなく、SNS の活動の広報活動も併せて行う必要があると考えられる。

④ボランティア情報は普段どこで手に入れますか。【複数回答可】



ボランティアルーム横の「2号館掲示板」が一番多い回答となった。学内掲示は様々な連絡で用いられ、学生も頻繁に確認するため、掲示板を用いたボランティア募集は学生の目に留まりやすいことが予想される。手書きの掲示物を作っているが、短い時間で印象に残りやすくするためにも、手書きの掲示は続けるべきである。

次に多かったのが「知り合いから」であった。ボランティアに興味のない学生が情報を得るとすれば、友人など周りの人から誘われることで、きっかけになることが多いと考えられる。倉陵祭など、一般学生が他の友人を誘いやすいような取り組みを行うことで、改めてボランティアに興味をもつことができるだろう。

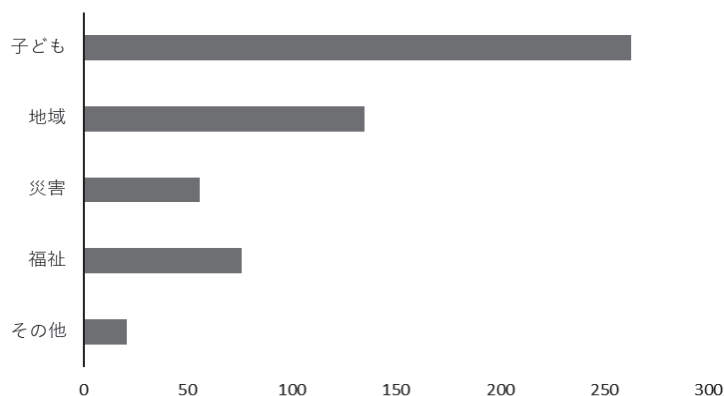
⑤今年度（令和4年度）、ボランティアに参加しましたか。

参加した	71 件
参加していない	260 件

今年度も新型コロナウイルスの影響もあり、ボランティアに参加したという全体の2割と少なく、ほとんど学生がボランティアに参加していないということが分かった。

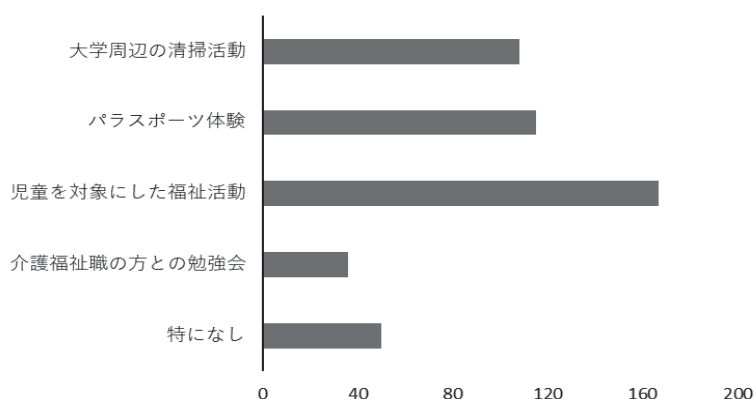
これらのボランティアに積極的な学生のサポートをしつつ、ボランティアに参加したいと思っている学生を増やすことが、今後取り組んでいくべき方針である。

⑥あなたが今後参加してみたいと思うボランティアの分野はどれですか。【複数回答可】



最も多かったのが「子ども」に関するボランティアで、次に「地域」が多い結果となった。今回のアンケートでは、教育学科の学生が多く回答していただいたということもあり、「子ども」のボランティアに参加してみたという学生が多いという結果になった。また、「地域」に関しては、講義で地域について学ぶ機会が多いことから、実際にボランティアを通じて体験してみたい学生が多いと考える。このことからこの2つのボランティアを積極的に取り入れることで、ボランティア参加者数を増やすことにつながると推測される。

⑦次の項目はボランティアルームが企画した活動です。この中にあなたが参加したい取り組みはありますか。



今回最も多かったのが「児童を対象にした福祉活動」である。⑥の項目でも触れたが、教育学部の学生の回答が多かったことから児童対象の活動が多いということが考えられる。そのほかにも、「大学周辺の清掃活動」「バラスポーツ体験」の得票率が高いことがみられ、興味を持っている学

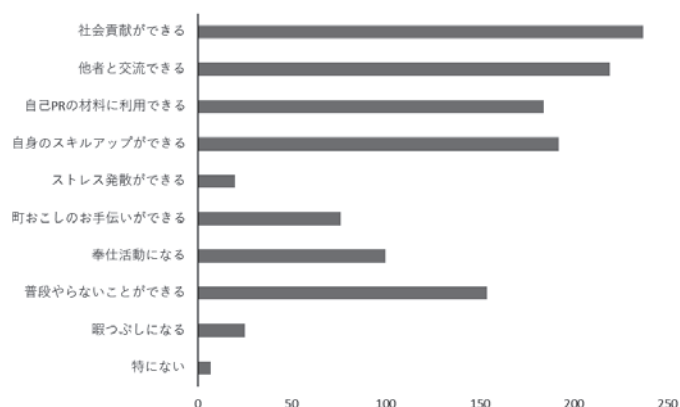
生が多いことから、倉田山清掃の活動、パラスポーツ体験は今後も継続して行っていくべきである。

⑧このような活動があれば参加したい等、具体的な意見がある人はお書きください。【記述】

- ・夏休み等の長期休暇中に行ってほしい
- ・植林
- ・幼児に関わるボランティア
- ・募金活動
- ・動物と関わる活動
- ・学校現場でのボランティア
- ・子どもに関わるボランティア
- ・スポーツ教室や地域のスポーツイベント
- ・ごみ拾いなどの奉仕活動
- ・警備関係

学生の中には、将来子どもと関わる職に就きたい学生が多いことから、子どもと関わるボランティアをしたいという声が多くみられた。他にも、ごみ拾いや募金活動などボランティアルームの企画活動に関わる意見も見られた。募金活動では、一般学生を含めて学外の募金活動を行うなど活動の幅が広げられる可能性がある。

⑨あなたがボランティアに参加することによって、どんなことが得られると思いますか。次の中から選んでください。



最も多かった意見が「社会貢献ができる」であり、次に「他者と交流できる」であった。多くの学生がボランティア活動は社会貢献であると認識しているということが考えられる。ボランティアの定義は「自発的な意思に基づき他者やや社会に貢献する行為」を指す。このことから、多くの学生がボランティアの意味や定義を理解しているということが分かる。

「他者と交流ができる」という意見では、社会貢献がボランティアと同等の意味を成しており、ボランティアに参加することが社会貢献になると考えると他者と交流ができるということが学生にとっての一番の利点であるということが考えられる。今後、ボランティアルームでは、「誰」と「どのような」交流ができるのかを明確にして学生に広めていくということが学生のニーズを満たせる上で大切になってくるだろう。

そのほかにも、「自身のスキルアップができる」、「自己PRの材料に利用できる」、「普段やらないことができる」といった意見の得票も多くあった。学生自身がボランティアを通すことで新たに知識・経験を得られるということも大事だということがわかる。ボランティア依頼が来た際に、参加した学生が何をえられるか、どのように発信していくかを考えていくことがボランティアに参加する学生を増やすことにつながっていく。

⑩ボランティアルームに対する意見や要望があればお願いします。【記述】

- ・大学周辺のボランティアを増やしてほしい
- ・4年間ありがとうございました。
- ・今後も訪れたいと思います。
- ・警備のボランティアをしたい
- ・楽しそう

情報提供を望む声や、激励の言葉など前向きな言葉が多かった。しかし、来年度には新型コロナウイルスの規制が緩和されることが発表されている。ボランティアに参加する学生が増えるだけでなく、依頼も増えるだろう。ミスが出ないようにするためにルームスタッフのスキルアップ講座などで一般学生の対応方法、情報共有の重要性を示すべきである。

4. 反省・まとめ・今後の展望

〈まとめ〉

今年度は、昨年度と同様に Google Forms を利用した。学生の伝達手段は、昨年度は新型コロナウイルスの影響ですべての講義が休校となってしまったため、LINE を用いて集計を行った。今年度では、一昨年と同様に許可を得た講義で QR コードを読み取ってもらい、回答という形となった。

〈反省〉

集計方法の反省点としては、配布した講義がルームスタッフの受講しているものであったため、回答していただいた学科・学部が偏ってしまった点である。学科が偏ってしまっただ点については、約 60% が教育学科の回答になってしまい、神道学科や国史学科に所属しているルームスタッフがいないため、回答が 10 件を下回る結果となってしまった。学年に関しては、3 年生・4 年生の講義数が少なく、講義を絞ることができず、4 年生に関しては講義での配布を行う

ことができなかつた。3・4年生で講義数が少ない学生は学校に来る回数も少ない。そのため、SNSでの配布が重要になってくるだろう。ボランティアルームに来てくれた学生にSNSの登録を勧めることを徹底する、ボランティアルームのスタッフだけでなく、先生方にも協力を仰ぐことで、より多くの学科の学生にアンケートを回答していただけると考える。

これらの反省から来年度は班全体で協力し、内容と用紙の作成を早め、配布の許可を12月半ばまでには押さえておき、誰がどの講義でQRコードを配布するのかを明確にしておきたい。

〈今後の展望〉

今年度は昨年度に比べて、ボランティア募集依頼も多く学生と関わる機会があった。しかし、関わっていない学生が多い中、今回のようなアンケートにも協力していただけた。これは、ボランティアルームが学生から信頼を得ているという証拠である。

今年度に比べ来年度からはボランティア募集依頼がどんどん増えてくるだろう。その時にしっかりと情報を伝えることができるように報連相の徹底、情報発信能力の向上など、対応ができるように今後もスキルアップに努めていきたい。

【文責：文学部コミュニケーション学科2年 竹内七菜実】

4. 資料

令和4年度 ボランティアルーム学生スタッフ一覧

No.	所属	学年	名前
1	文学部国史学科	3	河西 一成
2		3	橋本 彩花
3	文学部国文学科	3	一橋 朋希
4		3	國分 大雅
5		3	秋守 翔午
6	文学部コミュニケーション学科	3	伊藤 なゆた
7	文学部神道学科	3	國分 隆多
8	教育学部教育学科	3	大森 萌花
9		3	小芝 実結
10		3	高田 結菜
11		3	田中 ゆ衣
12	現代日本社会学部現代日本社会学科	3	浅野 久瑠実
13	文学部国文学科	2	酒井 杏菜
14	文学部国史学科	2	渡邊 晟
15	文学部コミュニケーション学科	2	竹内 七菜実
16		2	久保田 陵
17		2	田中 優陽
18	教育学部教育学科	2	井坂 安寿
19		2	石井 陽菜
20		2	大倉 すず
21		2	近藤 朱莉
22		2	篠原 広樹
23		2	中森 七海
24	現代日本社会学部現代日本社会学科	2	鎌田 真穂

No.	所属	学年	名前
25	文学部国文学科	1	飯塚 愛恵
26		1	神谷 岬
27		1	玉置 英紀
28		1	美濃部 奏美
29	文学部コミュニケーション学科	1	森下 くるみ
30		1	伊藤 美優
31	教育学部教育学科	1	青山 理伊音
32		1	大林 恋子
33		1	澤村 佳純
34		1	藺部 萌果
35		1	田中 希彩
36		1	中西 加奈
37		1	原 一貴
38		1	村井 かのこ
39		1	村上 愛果
40		1	山口 真凜
41		1	吉岡 紗菜
42	現代日本社会学部現代日本社会学科	1	岩野 倅汰
43		1	奥田 匠
44		1	河野 柊人
45		1	杉本 理沙
46		1	野澤 麻衣
47		1	山本 大貴